

## 小さく祈った日

牧師 山本 護

ベルカントだった蟬の声が義太夫調になり、晩夏から秋へ。刈りそびれた教会庭のセンダングサが種子をつけ、それにアキアカネが捕えられていました。脱出するために暴れたのか、翅がちぎれています。慎重に外してやりましたが、私の掌でモゾモゾするだけでもう飛べなかった。いつか到来する自分の死も勘定に入れて、生命とは何だろうか、と思い巡らせました。



詩人の谷川俊太郎がこんなことを言っている。「生命は無機物からの進化であるという説を読んだ。そうすると生というものは死から進化したものなのか。生は死の進化した形態なのだろうか」。とぼけたような、うまい物言いだなあと感心し、死から生への上昇、あるいは生から死への下降を思って我が身を顧慮しました。詩的膨らみは言葉で示された意味以上のものも捉え、聖書を読むうえで助けになるような気がします。

「はっきり言うておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へ移っている(ヨハネ 5:24)」。命から死への下降があるように、死から命への上昇がある。イエスの言葉は、その意味が分っても充分ではありません。だから詩的な膨らみによって、言葉の響き全体を柔らかく抱えたい。「そうすると生というものは死から進化したものなのか(谷川)」。

「はっきり言うておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる(5:25)」。念を押すように「はっきり言うておく」とくり返し示されたことを、意味だけでなく、この身体のすべてで取りこぼしなく感じたい。

その直前、イエスは38年間も身体が動かない(存在の拘束)人に「起き上がりなさい(5:8)」と命じ、その人は歩き出しました(5:9)。「起き上がる」とは、そのまま「復活」の謂。私たちはやがて召されますが、死に拘束されていても神の子の声を聞き(5:25)、起き上がって自由に歩きまわり(5:9)、永遠の命(5:24)に踏み入って行くのでしょ。

昆虫を診る獣医(虫医)を知らない。助けるすべなく、小さく祈り、傷を負ったアキアカネをそっと灌木に置き、帰り際に確かめるとじっとしていました。神の子の「起き上がりなさい」という言葉を聞いたのか、翌日にはもういませんでした。Ω